

# 原爆文学研究会報

第二一・二二号

原爆文学研究会 二〇〇八年一月

修飾の功罪 かつて豊田清史は「ヒロシマ」が修飾されることに異を唱えた。あるバスガイドが広島平和公園を案内しているのを聴いてやりきれなくなったのだという。ガイドは折り鶴で有名な原爆の子の像の前で、モデルとなった禎子が六四六羽まで折りながらも原爆症のため幼い命を奪われたのだと説明したという。「事實は確実に千三百羽くらい折っていた。つまり千羽以上折ってもついに禎子の生きるいのりは空しかったのである。この事実の前にこそ、修飾を絶したいまもぼくは無限の実感と平和への力を思うのである」(『八月六日』を描く』第二集(一九七一年六月、文化評論出版)あとがき)。

このような批判は当然のものだろう。私もかつて長崎平和公園の平和の泉前で「どうしても水が欲しくてとうとうあぶらの浮いたまま飲みました」という碑文について、水を飲めば恐ろしい原爆症にかかることがわかっていながらも手記の少女は飲まずにいられたかったのだ、とあるバスガイドが説明しているのを聴いて首をひねった覚えがある。水を飲んだ時点で少女がその水に含まれる放射性物質のために原爆症にかかることを予見していたとは考えにくい。誤りは正すべきであるという批判に異論はない。

しかし、なぜそのような修飾が生まれるのかと問うてみる必要はあるとも思う。より悲劇的に修飾された物語は、それに現実性を感じ

じる語り手と聴き手がいたからこそ生まれたものであるはずだ。そして、その誤った物語の方がずっと広く支持され、原爆のイメージを形作っているのかもしれないのである。事実と異なるというだけの理由で、修飾をばっさり切り捨てるのではなく、個々の背景をなるべく丹念にたどる姿勢は必要だと思う。(中野和典)

## 第二一回 原爆文学研究会報告

二〇〇七年七月二十八日(土)九州大学六本松キャンパスで開催した「第二一回原爆文学研究会」には二〇名が参加。

川口氏の発表については「生きているものが死者の代弁をして告発することは可能か」「告発者と単独者との関係をどのように考えればよいのか」等の質疑がありました。



楠田氏の発表については「なぜ重松の語りは『ヒストリー』という言葉に収斂してゆくのか」「『黒い雨』のようなためらいのない回想の記し方にどのような意味が認められるのか」等の質疑がありました。

## 『黒い雨』の中のヒストリー

楠田 剛士

井伏鱒二『黒い雨』（初出「新潮」昭40・1〜41・9）における関問重松は、「被爆日記」を筆耕する人であり、また原爆以前の出来事を実に様々に思い出す人である。被爆前と被爆後の比較は、他の小説や記録においても見られる。これは原爆という未曾有の出来事を、過去の体験と照らし合わせることによって、可能な限り了解しようとしているように思われる。

では、「被爆日記」のなかで重松が子供時代を繰り返し思い出しているのはなぜだろうか。これも過去の体験の参照による現状理解として説明できるだろうか。例えば、頬白がどう鳴くか話題になる場面があるが、重松は子供の頃「チンチク二十八日」と鳴いていたと答えている。頬白がどう鳴こうが、この場面から原爆の被害状況をとらえるのは難しい。「被爆日記」が清書される被爆四年十ヶ月後において子供時代が思い出されているが、これも原爆と直接には結びついていない。『黒い雨』という小説から原爆被害の状況を読み取るようにする読者にとって、原爆以前の子供時代のエピソードはあってもなくても構わないかもしれない。だが、なぜそのような記憶が繰り返し物語の中で描かれるのか。

念のため、井伏が『黒い雨』の執筆において多く依拠した『重松日記』を確認してみると、そこには筆者・重松静馬の子供の頃の思

い出が記されていることがわかる。それらの思い出がそのまま『黒い雨』に取り入れられているのかというと、そうではない。『黒い雨』で描かれる重松の子供時代の記憶は、井伏自身の体験に基づいた挿話が多く採用されている。たとえば、よその土地で水を飲むときは必ず三度嗽をしてから飲んだり、凶兆としての銀色の虹を見たりしたことなどである。

しかし、ここではその引用の是非や典拠との優劣を問いたいのではない。確認したのは、そのような子供時代を過し、それを思い出しながら生きる人物として、『黒い雨』の重松が造形されているという点にある。「被爆日記」は重松という一人の人間の眼を通して書かれるのであるから、小島村で幼少期を送った過去が、重松その人の感性に深く関わっていることは確かだろう。「農家に生れて樹木を見なれて来た僕」という重松自身の言葉の通り、「被爆日記」の中で原爆で破壊された街を記すとき、あるいは「被爆日記」を書いている現在の小島村の光景を眺めるとき、そこには樹木に対する特別なまなざしが注がれている。

重松の過去は重松の過去以外の何ものでもない。子供時代の記憶を含めた重松の半生は、大文字の「ヒストリー」に回収されない、個別的で一回限りの体験としての小文字の「ヒストリー」である。『黒い雨』で子供時代の記憶が繰り返し描かれるとき、大づかみの「原爆体験」や「被爆者」からはとらえられない、証言者の具体的な生の細部が読者に差し出されているのではないだろうか。

## 第二二回 原爆文学研究会報告

二〇〇七年一〇月二〇日(土) 九州大学六本松キャンパスで開催した「第二二回原爆文学研究会」には一二名が参加。



内田氏の発表については『原爆文学に一定のイメージがつきまとう』という引用があるが、それは共有されていると言えるのか」「『不謹慎』という切り口だけで『爆心』全体を読み解くことはできるのか」「空白である爆心と周縁にある個々の物語という構図で読んだ方が良いのではないか」等の質疑がありました。

中野氏の発表については「原爆被害という、本来は金銭に交換できないはずのものを売りものにしていくことの後ろめたさをどのように考えればいいのか」「一九五二年以後の写真による原爆被害の公開の問題を「暴露の時間」内部に読み込むのは無理があるのではないか」「熊太が自分のことを『露出症患者』だというのはなぜか」等の質疑がありました。

### ◇ 研究発表要旨1

## 青来有一 『爆心』の位置

内田 友子

「原爆で死んだ人たちのつらく陰惨なイメージを逆転させたかった」(『文學界』一九九七年七月号での対談)という一見不謹慎な試みでもって青来有一が「雪の聖地」(同、六月号)を書いてから約十年、現在のナガサキにおける日常と群像を描いた短編集『爆心』(文藝春秋)が二〇〇六年十一月に刊行された。伊藤整文学賞、谷崎潤一郎賞をダブル受賞している。

収められた六編の中には、さまざまな形をとりながら十年前の試みと通底している作品がある。今回の発表で主にとりあげたのは「蜜」と「石」で、前者は何不自由なく暮らす三十三歳の有閑マダムが十八歳の少年を誘惑しようとしてあれこれ画策する話、後者は四五歳の知的障害者の男性が久々に再会した幼なじみとけんか別れし、心寄せた女性とも縁がなく、唯一の肉親である母はそのままに重篤という状況で、ひたすら孤独感を募らせる話。と、要約してしまうとずいぶん味気ないが、注目したいのは、これらがいずれも現在進行形のナガサキの物語として描かれている点だ。

「蜜」では、初めての密会として少年を家へ呼び入れるのに主人公が選んだのが八月九日、平和祈念式典の時間帯である。高齢の舅と姑は毎年そろって式典へ参列するため、家の者が確実に出払う絶好のチャンスとして式典は利用される。また、姑から家族を原爆で

一度に失ったときの話を聞いても主人公は「頭に過ぎった言葉もたちまち灰となって消えていくばかり」と感じ、〈つらく陰惨なイメージ〉を想起できない彼女の淡白さはむしろ無邪気ですらある。

陰惨なイメージの逆転、という試みとして「雪の聖地」では、被爆による死者たちが冬の爆心の公園に「黒い影」となって現れ、「ぼわんぼわんと跳ねて、みんなで金魚のように雪を食べ」て喉の渇きを癒すという、ユーモラスな幻影が描かれた。この〈幻影〉が、たとえば『爆心』収録の「石」では、主人公が聴く浦上川のほとりに転がる石の声となり、さらに「てれんばれん」（『文學界』〇七年七月号）では「白ヌキの影」Ⅱ「てれんばれんさん」として描かれる。

このように、現在進行形のナガサキに幻影というかたちで〈原爆〉を織り込む手法、土地の記憶として民間伝承的に物語へ溶かしていく手法が今後どのように展開されるのか。そしてその手法は、この場所が六十二年來担ってきた被爆地ナガサキというパブリックな役割とどのように折り合っているのか、いかなのか、興味深い。

また、この短編集に収められている作品はどれも一人称告白体にとられており、研究会の参加者からは「これらの〈語り〉は、いったい誰へ向かって語られているのだろうか。」という疑問があがった。たとえば、〇六年一月には語り部に対する政治的発言の自粛要請が問題となり、また、語り部の高齢化にともなう次世代の語り部育成がここ数年來の課題となっているなど、被爆地ナガサキでは〈語り〉をめぐる議論がたびたび繰り返されている。『爆心』の文体の選択についても、この現状と連動するところで考えてみたい。

◇ 研究発表要旨2

## 触媒としての身体

—大田洋子「暴露の時間」論

中野 和典

「被爆者の裸像」という言葉からどのような像<sup>イメージ</sup>が想起されるだろうか。焼けだたれた顔、背中、四肢。炭化して塑像のようになってしまったうつむく、あおむく焼死体（もはやこれは裸像と呼んではいけないのかもしれない）。見る者に衝撃を与える被爆者の痛々しい裸像は、原爆の像を構成するものとして重要な位置を占めている。一度それを目にした者が原爆を思い浮かべるとき、その像には被爆者の裸像がほとんど常に付随していると言えるほどである。

大田洋子「暴露の時間」〔『世界』（一九五二年六月）↓『日本の原爆文学』第二卷（一九八三年八月）〕は、一九五〇―五二年の広島を舞台に、原爆によって受けた火傷の深刻さから「原爆二号」と呼ばれるようになった平井熊太が、六年間入院していた博愛病院を退院し、産業奨励館（原爆ドーム）の横で自分の裸体を載せた絵はがきなどを売る店を始める姿を描いた小説である。この小説は以前から大田洋子と交流があった「原爆一号」吉川清をモデルに書かれていることは明らかであり、吉川清の体験がどのような形で小説に取り入れられたかということは、「暴露の時間」とそれを挟むようにして成立した吉川清の二つの著書『平和のともしびー原爆第一号患者の手記』（一九四九年八月、京都印書館）・『「原爆一号」といわれて』（一九八一

年七月、筑摩書房」とを比較することによってある程度確かめることができる。小説では、熊太が病院で受けた冷遇のありさまや、熊太の店の周りで行われているいかがわしい商売のありさまが語られているのだが、それは小説の三年前に書かれた『平和のともしび』では語られず、小説の約三十年後に書かれた『「原爆一号」といわれて』においては語られていることである。つまり、「暴露の時間」は『平和のともしび』では語られていなかった吉川清の直面した問題を暴露する、一つの暴露小説として読めるものになっている。

「暴露の時間」の結末は、熊太がストリップを見に行つて「おれの方がストリップなんだ。見ているやつの方が露出症患者なんだ」と思い涙を流す場面で終わっているが、小説の成立時期を鑑みるとこの結末はある問いを浮かび上がらせる。「暴露の時間」が発表された一九五二年は、サンフランシスコ講和条約の発効によって日本が独立した年であり、占領期間中に人目に触れなかった原爆写真が「アサヒグラフ」原爆特集号（一九五二年八月六日）他の出版メディアによつて公開された年である。痛々しい被爆者の身体が被写体として公にされる時期に、その痛々しいケロイドを人目にさらしてきた熊太はなぜさめざめと泣かねばならなかったのだろうか。

発表では、「暴露の時間」と「原爆一号」こと吉川清の二つの体験記との比較を通じて、この小説が文字通り暴露しているものについて考察した結果を報告した。

## 彙報

### 第二回 原爆文学研究会

- 日時 二〇〇七年七月二十八日（土） 午後一四時より
- 会場 九州大学六本松キャンパス大学院棟一〇一号室
- 研究発表

告発と沈黙と——石原吉郎を中心に——

川口 隆行  
楠田 剛士

『黒い雨』の中のヒストリー

### 第二二回 原爆文学研究会

- 日時 二〇〇七年一〇月二〇日（土） 午後一四時より
- 会場 九州大学六本松キャンパス大学院棟一〇一号室
- 研究発表

青来有一『爆心』の位置

内田 友子  
触媒としての身体——大田洋子「暴露の時間」論 中野 和典

### 編集後記

会報の発行が遅れ申し訳ありません。今年も本研究会の運営へのご協力をよろしくお願いいたします。（N）

発行元 原爆文学研究会事務局

〒八一一一六五二〇 福岡市中央区六本松四一一一

九州大学大学院比較社会文化研究院 波瀾剛研究室内

tel/fax 092-726-4595 e-mail [tnamigata@scs.kyushu-u.ac.jp](mailto:tnamigata@scs.kyushu-u.ac.jp)

URL <http://www.scs.kyushu-u.ac.jp/~th/genbunken/index.htm>